



## がんシンポジウムを開催しました。

当院では地域がん診療連携拠点病院として地域のがん診療の充実を目指し、医療従事者を対象として定期的に「がんシンポジウム」を開催しています。

平成30年4月27日（金）に開催された、平成30年度1回目となる「第4回がんシンポジウム」では、「新病院でのがん診療 一何ができるようになったか？今後どのように発展させていくのか？」をテーマに、新病院における外来化学療法室・手術室・放射線治療室・内視鏡センター・無菌室という切り口で講演を行いました。今月号では当日行われた講演の概要を紹介します。



当日は院外からも多数の方にご参加いただきました。

### 笑顔あふれる外来化学療法室

化学療法内科 部長・外来化学療法室長 五月女 隆

新病院に移り、「通院治療室」は「外来化学療法室」と名称を変え、新たなスタートを切りました。スペースが2倍となり、14床から20床に増床、外来診察室、問診相談室、待合室も備えています。医師（室長）が常駐し、受付事務担当者1名、がん化学療法認定看護師2名と乳がん看護認定看護師1名を含む7名の看護師により運営されています。国内で使用可能なあらゆる化学療法が可能な体制で、地域の病院ならではの家族や社会的背景を含めたきめ細やかな対応をしています。

単なる『化学療法を受ける場』で満足することなく、病棟を含めた院内化学療法の中心的役割を果たすこと、院内の化学療法に関する問題点を抽出し、解決につなげること、新規の治療法について勉強会などを開催し早期に理解を深めることをミッションとして果たしていくつもりです。

### 新病院の手術室の紹介とこれからの展望

外科 部長 竹内 男

新病院へ移転して、手術室が占有する面積は旧病院と比較して約1.5倍になりました。室数は旧病院と同様の8室ですが、それぞれの手術室が広がったことで、多くの医療機器を使用する術式においてもストレスなくゆったりした環境で手術が行えるようになりました。また、廊下や収納スペースが広がったことにより、患者さん・スタッフ・機器の動線がスムーズになり、エリア全体の清潔感が向上しました。

映像系に関しての充実度が向上しました。壁面大型モニター、天釣りモニターが設置され、術野映像や検査画像を表示できるようになりました。天釣り式ビデオカメラ・映像入力端子から入力された術野映像が映像管理システムに送られ、各モニターに表示したり、動画をHDDに保存したりできるようになり、手技の向上、教育や学会発表の動画作成に役立っています。

3D鏡視下手術システム、電動式自動縫合器などの最新式の医療機器も導入され、より精緻な手術が行えるようになりました。昨今ロボット支援手術システムが普及し始めていますが、当院でも将来導入できるようにスペースの確保ができています。

## 放射線治療の基礎と今後について

放射線科 副部長 福島正秀

病院移転・放射線治療機器の更新に伴い、当院の放射線治療は約3か月の間停止しておりましたが、2018年4月より再開しております。

停止期間中、東葛地域の患者様、並びに医療機関の方々にはご迷惑をおかけしました。

旧病院では1998年に独S I E M E N S社製M E V A T R O Nを導入、地域の放射線治療を担って参りましたが、近年老朽化著しく、新病院移転を機に米V A R I A N社製T R U E B E A Mへ更新いたしました。

施設基準等の点からI M R T（強度変調放射線治療）の実施は未だ難しいものの、より副作用の少ない多門照射等への対応を始めております。

今後もより高度なニーズに対応できる様、精進していく所存です。

## 新病院の内視鏡センター ～未来に向けて～

内視鏡センター所長 森居 真史

身体の内부를観察してみたい。そんな人類の願望の源流は紀元前4世紀の古代ギリシャ時代に遡ります。しかし、実際に胃内を観察することに辛うじて成功したのは今からわずか150年前のことに過ぎません。いわゆる「胃カメラ」が、我が国で世界に先駆け誕生したのはおよそ70年前ですが、その後内視鏡は着実に進歩の道を歩み、観察から治療までとその用途は広がっています。制約はあるものの早期癌に対する内視鏡治療は今や当たり前のこととなり、技術面においては成熟期を迎えています。

近年の画像処理分野における革新には目を見張るものがありますが、NBIなどの画像強調技術のみならず、観察画面における人工知能を活用した診断サポート技術も実用化されつつあります。新病院となり、これら道具を我々がさらに手にすることで恩恵を受ける人々が増えることを切に願います。

## 新病院無菌室と血液内科のこれから

血液内科 部長 藤川一壽

新病院の血液内科は私が加入して医師3人体制となり、4つの無菌室が稼働することとなりました。当院ではこれまで数十例の同種移植を行ってきましたが、今年度から骨髄・臍帯血バンクの移植認定施設の要件が厳しくなり、残念ながら当院での移植は困難になりました。全国の移植適応患者さんを受け入れるのに十分な施設数が確保できたこと、高齢化に伴い今後同種移植件数の減少が予想されることから、移植施設をセンター化して人員の充実した大学病院等の施設のみで同種移植を行おうという施策です。しかしこの高齢化に伴って多発性骨髄腫や悪性リンパ腫の患者さんの増加が予想され、その治療の一環として自家造血幹細胞移植が必要となる場合があります。当科のこれまでの移植の経験と新病院の設備はまさにここで活かせると思われ、今後は積極的に自家移植を行っていこうと考えています。